

看護師の気づきへのアプローチと行動変容 ～環境整備から見たこと～

Approach and behavior change regarding the awareness of a nurse by the environment improvement

東 8 階病棟

熊谷貴代 (Kiyo KUMAGAI) 柴田亜利子 青柳美恵子

〈要旨〉本研究の目的は、環境整備に関して、シミュレーションという教育方法のアプローチをとることで、対象者が何に気づき、実践において行動レベルで変化が起きるかを明らかにすることである。患者の療養生活の環境を整えることは看護師の役割であり、業務的ではなく、患者の目線になって考える感性を大事にして行う必要がある。患者に寄り添った看護を、経験年数の少ない看護師にも提供して欲しいという思いから、環境整備に焦点を当て、シミュレーション教育で自分の「気づき」を高め、患者に配慮した行動をとれるようになるかを検討した。環境整備を「環境調節」「安全」「接遇」「プライバシー管理」の4つのカテゴリーに分類して考察した結果、どのカテゴリーにおいても、シミュレーションは気づきを促し行動変容を起こさせるきっかけとなることがわかった。しかし、気配り、心遣いと表現されるような行動が必要とされる「接遇」「プライバシー管理」は、シミュレーション教育だけではその行動を習慣化させることは困難であり、患者に配慮した環境整備を習慣づけるためには、別の教育アプローチが必要であることが示唆された。

キーワード：環境整備、シミュレーション、気づき

I. はじめに

患者にとって、病室は生活の場であるが、入院前の環境と大きく異なる上に、自分で環境を整えられなくなることがある。患者の療養環境を整えることは看護師の役割であり、業務的ではなく、患者の目線になって考える感性を大事にして行う必要がある。しかし現状は、患者のベッドサイドに、処置に使用した物品やトイレトペーパーが残されていたり、面会者用の椅子の上に物が置かれているなど、患者が生活する場として目を疑うような光景が見られる。こうした現状には、看護師の気づきの不足が影響しているのではないかと考えた。特に経験年数の少ない看護師は日々の業務に追われ、患者への配慮が不足していると感じるため、気づきを促すことで行動変容につながるかを検討したいと考えた。気づきを促す教育方法としてシミュレーションが有効¹⁾であると先行研究で言われている。環境整備においてもシミュレーション教育が有効ではないかと考え、教育アプローチを変えることで、対象者が何に気づき、その後の実践において行動レベルで変化が起きるかを検討した。

II. 目的

環境整備に関して、シミュレーションという教育方法のアプローチをとることで、①対象者が何に気づき、②実践において行動レベルで変化が起きるかを明らかにする。

III. 方法

対象者はA病棟の看護師経験年数が1～4年目、女性、年代は20歳代の看護師18人。

対象者に同じ内容でシミュレーションを実施し、教育アプローチを変えたことによるシミュレーション前後の環境整備実施の変化を比較した。部署の環境整備に関する業務手順を参考に、独自のチェックリストを作成し、対象者の環境整備の実際をシミュレーション前（時期Ⅰ）・シミュレーション後1～3週間（時期Ⅱ）・シミュレーション後1ヶ月（時期Ⅲ）で評価した。シミュレーションに全員参加出来るよう、日程は3日間に分けた。チェックリストは対象者の行動や気づきの変化を比較しやすいように、13項目（「環境調節」5項目、「安全」2項目、「接遇」4項目、「プライバシー管理」2項目）で分類し、度数を集積してパーセンテージで表し比較した。

IV. 倫理的配慮

1. 研究の対象となる個人の権利擁護

対象者に研究への参加は任意であり、いつでも研究参加の同意撤回が出来ること、参加に同意しないことで不利益な対応は受けないことを説明する。シミュレーションへの参加は、強制力を排除するため、個々へ依頼せず、看護師経験年数が1～4年目のスタッフ全体へ口頭および書面で周知し対象者を募る。

2. 研究に関わる個人情報の保護

シミュレーション前後のチェックリストは、第3者がデータを電子化し、研究者は個人が特定出来ないように匿名化したデータで分析を行う。研究終了後は、紙データは速やかに粉砕して破棄する。電子データは消去する。

3. 研究対象者からインフォームド・コンセントを受ける方法

研究者から趣旨・方法・倫理的配慮について、口頭および書面で説明し、同意が得られれば、同意書を提出してもらう。

4. 研究によって生じる個人への不利益および危険性、それが生じたときの対策

勤務時間外にシミュレーションを実施することによって、時間の制約があるため、同意撤回の自由について事前に説明し、同意撤回書をいつでも出していいことを説明した。

5. 研究・社会に対する貢献

本研究結果は、教育のアプローチを変えたことで、気づきや行動に変化が生じるかについて明らかにし、他の事例における教育にも応用が出来る可能性がある。また、環境整備に関してのシミュレーション教育が有効であるかを明ら

かに出来る。

本研究は、信州大学医学部医倫理委員会の承認を得ている。

V. 結果

環境調節に関する5項目のうち、「ベッド周囲が汚れていない」「ゴミ箱が片付けられている」「ロッカーやテレビ台の上に埃がない」「尿器などに排泄物が溜まっていない」は、時期Ⅱで上昇し、時期Ⅲでも維持できていた。「不要な医療用具が片付けられていた」は、時期Ⅱは大きく上昇を認めたが、時期Ⅲは低下した(図1)。

安全に関する2項目「ナースコールの位置が適切である」「ベッドの高さが下げられている」は、シミュレーション前後を通して高かった(図2)。

接遇に関する4項目のうち、「寝具の汚れや皺がない」「枕や掛け布団の向きが合っている」「面会者用の椅子に物が無い」は、時期Ⅱは上昇したが、時期Ⅲは低下した(図3)。

プライバシー管理に関する2項目のうち、「オムツ等が他者の目につくところがない」は、時期Ⅱは上昇したが、時期Ⅲは低下した。「プライバシーが配慮されている」は、シミュレーション前後を通して高かった(図4)。

VI. 考察

環境調節は、シミュレーションの効果があり、他者の行動の観察やグループワークでの振り返りから、個々の不足していた点に気づくことができ、その気づきを維持出来ていた。ラウンド時に清掃用のガーゼを持参することとなってお

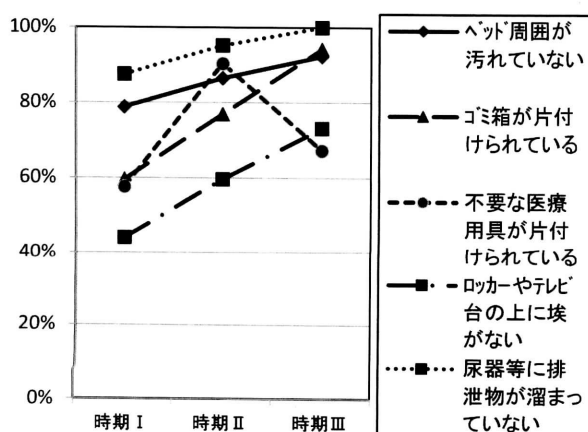


図1 環境調節の評価の変化

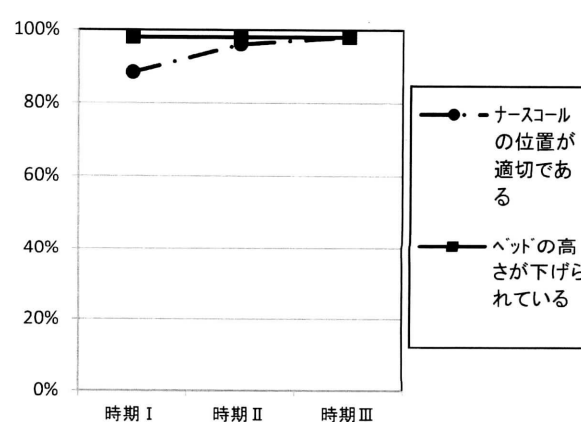


図2 安全の評価の変化

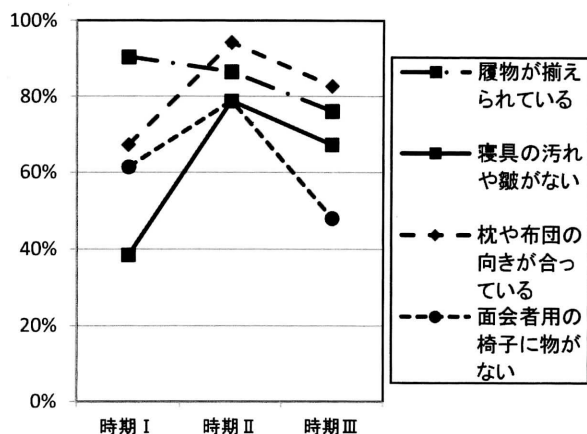


図3 接遇の評価の変化

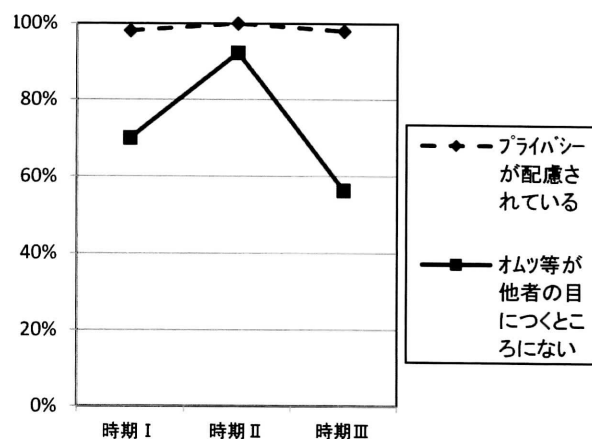


図4 プライバシー管理の評価の変化

り、環境整備の一環として、清掃をするという意識が高く、そのような結果が得られたのではないかと考える。不要な医療用具の片づけに関しては、シミュレーション後の振り返りの中で、「看護師が働きやすいように置いてしまっている」等の気づきが多かったこともあり、時期Ⅱで大きく上昇した。しかし、日々の忙しさの中で、便利さを優先してしまう現状があり、気づきだけでは行動変容を維持することが出来なかったのではないかと考える。

安全は、シミュレーションの実施に関連性がなく、どの時期も高かった。当病棟では、転倒転落のベッドサイドカンファレンスを行っており、日頃から意識して実践することが出来ていると考える。

接遇やプライバシー管理は、シミュレーション前より実践出来ていた1項目以外の全てで、時期Ⅲで低下し長期的な効果が得られなかった。これらの項目は、気配り、心遣いと表現されるようなことで、忙しくなると後回しになりがちである。これらは、対象者の生活観や価値観が背景にあり、気づくことは出来ても、定着させることが困難であると考えられる。

シミュレーションは気づきを促し行動変容を起こさせるきっかけとなったが、維持させることは困難であった。伊藤らは「気づきとは、疑問にぶつかり、行動変容の必要性を感じて具体的に行動を起こし、その行動が習慣化すること」と述べている²⁾。今回のシミュレーションでは、行動変容を起こすきっかけとなったが、維持するまでには至らなかった。環境整備を習慣づけるために、環境ラウンドやチェックリストを用

いた研究も報告されている。それらの方法を組み合わせた関わりで、強化していくことが出来るのではないかと考える。

研究の限界として、チェックをした環境の患者の重症度が異なる点・対象者をチェックする評価者が2名のため、主観的な意見が反映されてしまう点・3回のシミュレーションはそれぞれ参加者が違い、気づきの共有の度合いが異なる点がバリエーションを生じさせている可能性がある。

VII. 結論

環境整備に関しても、シミュレーションは気づきを促す効果があると言える。しかし、個人の価値観に左右されるものについては、気づきだけでは行動変容は維持できない。維持するためには別の教育アプローチとの併用が必要と考える。

引用・参考文献

- 1) 佐藤富貴子, 笠井美香子, 井越寿美子: 新人看護師の成長を支援する臨床技術トレーニング, 看護, 11月臨時増刊号, 66(14), p.95-96, 2014
- 2) 伊藤みどり: 指導が求める「気づき」の正体と「気づき力」を高める教育的視点, 看護人材育成, 12(1), p.10, 2015